

国立国語研究所学術情報リポジトリ

表紙,目次,奥付,その他

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://repository.ninjal.ac.jp/records/2031

日本語科学

Japanese Linguistics

6

1999年10月

October, 1999

国立国語研究所

The National Language Research Institute

Tokyo, Japan

日本語科学 6

Japanese Linguistics 6

国立国語研究所

The National Language Research Institute

1999年10月

October, 1999

脳からみた言語 廣瀬 肇 3

研究論文 Articles

サエとデサエ

Distinction between focus particles *sae* and *desae*

菊地 康人 KIKUCHI Yasuto 7

ダケの位置と限定のあり方—名詞句ダケ文とダケダ文—

A semantic analysis of *NP-dake V* and *S-dake-da*

安部 朋世 ABE Tomoyo 32

愛媛県青島方言のアクセント

Aoshima, a part of Ehime Prefecture dialect accent

清水 誠治 SHIMIZU Masaharu 49

秋山 英治 AKIYAMA Eiji

確認要求表現としての「ダロウネ」

Expression seeking confirmation with sentence-final form *daroo-ne*

宮崎 和人 MIYAZAKI Kazuhito 71

書評 Review

横山詔一・笹原宏之・野崎浩成・エリック=ロング編著

『新聞電子メディアの漢字—朝日新聞 CD-ROM による漢字頻度表—』

A Study of the Use of Kanji in Electronic Newspaper Media

豊島 正之 TOYOSHIMA Masayuki 91

世界の言語研究所(6) フランス国立科学研究センター音声言語研究所 CNRS LPL

西沼 行博 103

第7回国立国語研究所国際シンポジウム報告 107

全体会／第1専門部会／第2専門部会／第3専門部会

平成11年度国立国語研究所公開研究発表会ご案内

既刊内容 (第1号～第5号)

投稿規定・執筆要領

編集委員会からのお願い／『日本語科学』5 正誤訂正

編集後記

平成11年度 国立国語研究所公開研究発表会 ご案内
「日本語学習のひろがり－日本語総合シラバスの構築に向けて－」

国立国語研究所は、毎年、公開の研究発表会を開催しています。平成11年度の内容は、進行中の研究課題「日本語総合シラバスの構築と教材開発指針の作成」の中間報告です。

日時 平成11年12月21日(火) 午前10時～午後5時

場所 国立国語研究所講堂ほか 公開(入場無料, 参加申込み不要)

外国語としての日本語の学習者は‘多様化’しています。さまざまな背景を持った人々が、さまざまな目的のために、さまざまな環境で日本語を学習しています。「日本語総合シラバス」は、日本語学習の内容になりうるあらゆる項目を網羅し、どんな学習者でも、この中から学習項目を選択することによって自分だけの学習内容(個人シラバス)を組み立て最適な学習目標を立てることができる、そのような学習項目一覧表を作ろうという試みです。‘あらゆる学習項目’を網羅するため、「日本語総合シラバス」は、日本語体系、日本語によるコミュニケーション、日本の社会文化といった複数の次元にわたる‘多次元シラバス’として作成します。研究は、平成8年度～13年度の6年計画で進行中です。その第4年次に当たり、シラバス構築の見通しとこれまでに検討された問題点とお話しして皆様のご意見をいただきます。

(プログラム概要) ※内容は今後変更の可能性があります

午前 ポスター発表(この研究の中で取り上げられた具体的な課題についてポスターディスカッションの形で発表し、参加の皆様と討論を行います。研究所内の他の研究と、下記「視聴覚教材フォーラム5」に関するポスターも展示します)

午後 全体会(パネルディスカッション)

発表①「総合シラバスの構想と研究経過」 発表②「学習者と学習機会」

発表③「日本語学習の内容」 発表④「教育システムと学習者」 討議

「視聴覚教材フォーラム5」公開発表会

日時 平成11年12月22日(水) 午前10時～午後5時

場所 国立国語研究所講堂 公開(入場無料, 参加申込み不要)

ビデオ教材『日本語教育映像教材初級編「日本語でだいじょうぶ」』を日本語教授に使用方法について、応募された方々によるワークショップを10月末に行います。この発表会では、そこで作成された教案例と討議経過をポスターと口頭発表で報告します。

問い合わせ先(「公開研究発表会」「視聴覚教材フォーラム5」とも)

国立国語研究所日本語教育教材開発室 電話 03-5993-7661(直通)

電子メール makion@kokken.go.jp(中道) ynonami@kokken.go.jp(能波)

既刊内容（第1号～第5号）

【第1号】（1997年4月）

- 創刊のことば 水谷 修
字体に生じる偶然の一致—「JIS X 0208」と他文献における字体の「暗合」と「衝突」—
笹原 宏之
連用形の時制指定について 三原 健一
過去形の使用に関わる語用論的要因—日本語と朝鮮語の場合— 井上 優／生越 直樹
Phonological characteristics of Japanese-derived borrowings in the Trukese of
Micronesia Shinji SANADA
オーストラリア・ビクトリア州の通訳サービスと日本語 平野 桂介
『東京語アクセント資料』と辞書アクセント—尾高型アクセントを事例とした資料評価—
相澤 正夫
雑誌九十種表記表の統計 宮島 達夫
助動詞「ない」の連用中止法について 金沢 裕之
「レキシコンにおける名詞」プロジェクトについて ヨハナ・マティセン
世界の言語研究所(1) 国立国語研究院（韓国） 生越 直樹

【第2号】（1997年10月）

- 言語の「科学」に思うこと 鈴木 孝夫
安居島方言アクセントについて 清水 誠治
Survey of standardisation in Tsuruoka, Japan: Comparison of results from three
surveys conducted at 20-year intervals Masato YONEDA
Market value of languages in Japan Fumio INOUE
温度を表す形容詞の意味体系—《物》と《場所》の対立— 久島 茂
買物における挨拶行動の地域差と世代差 篠崎 晃一／小林 隆
雑誌三種の表紙における文字使用の変化 中野 洋／中川 美和
世界の言語研究所(2) CSLI（アメリカ合衆国） 加藤 安彦
第5回国立国語研究所国際シンポジウム報告

【第3号】（1998年4月）

- 「…的」と「ポストモダン」など 大岡 信
程度副詞と主体変化動詞との共起 佐野 由紀子
京阪方言における親愛表現構造の粹組み 岸江 信介
連体修飾節のテンスについて 岩崎 卓
「前提・焦点」構造からみた「は」と「が」の機能 天野 みどり
例示の副助詞「でも」と文末制約 森山 卓郎
翼を持った日本語 1987～1994年度出版を中心に見る渡米語 エツコ・オバタ・ライマン
言語の対照研究と言語教育 佐々木 倫子
世界の言語研究所(3) インド国立科学ドキュメンテーションセンター INSDOC（インド）
チャウラ・K・アショク

第5回国立国語研究所国際シンポジウム（第4専門部会）報告

【第4号】（1998年10月）

脚本の醍醐味	寺島 アキ子
日本語動詞の活用体系	ハイコ・ナロク
現代日本語の不完結相 —シツツアルの意味記述—	副島 健作
標準語法の性格	田中 章夫
年少者日本語教育に関する教師の言語教育観	岡崎 敏雄
水海道方言の対格 —有生対格と無生対格の統語論—	佐々木 冠
富山県砺波方言の終助詞「ジャ」の意味記述	井上 優
世界の言語研究所（4）中国社会科学院 言語研究所（中国）	古川 裕
国立国語研究所創立50周年記念事業／第6回国立国語研究所国際シンポジウム・ 新プロ「日本語」国際シンポジウム ご案内	

【第5号】（1999年4月）

21世紀におけることばの役割—求心性と多様性—	小池 生夫
語彙概念構造レベルでの複合	小林 英樹
東京と大阪の談話におけるあいづちの種類とその運用 ヤスコ・ナガノ・マドセン／杉藤 美代子	
富山県における指定辞「ダ・ジャ・ヤ」の分布と変遷	小西 いずみ
外来語アクセントにおける原語の発音の関与について—4モーラ以下の語を中心に—	田野村 忠温
高知県方言の副助詞「パー」の意味機能	上野 智子
国語辞典編集のための用例データベース	木村 睦子／加藤 安彦／田中 牧郎
談話研究のツールとしての転記エディターと談話データベース	亀山 真一
世界の言語研究所（5）語言文字応用研究所（中国）	胡 士雲／古川 裕
国立国語研究所創立50周年記念事業 見聞録	片桐 恭弘／近藤 泰弘
第7回国立国語研究所国際シンポジウムご案内	

『日本語科学』投稿規定・執筆要領

(1999年10月現在)

1. 目的

本誌は、国立国語研究所における研究、ならびに国立国語研究所の研究活動と関連を有する研究の成果を公表することを通じて、広汎な日本語研究の発展に寄与しようとするものである。

2. 発行の時期

本誌は年2回(4月, 10月)発行する。(投稿の受付は随時)

3. 投稿資格

上記の目的に合致する内容の原稿であれば、投稿資格は問わない。

4. 原稿の内容と種類, 分量

投稿原稿は未刊行のものに限る。投稿原稿の種類と分量(タイトル, 氏名, キーワード, 要旨, 概要を含む)は以下のとおり。

研究論文: オリジナルな知見の提供を含む学術論文。(20ページ程度)

調査報告: 調査結果の記述を主とする報告。(20ページ程度)

研究ノート: 問題提起, 事例報告, 中間報告などの小論文。(10ページ程度)

この他, 所内外の研究者に**展望論文**(研究動向, 現時点での課題, 将来の展望などについて論じた論文, 20ページ程度), **書評論文**(20ページ程度)の執筆を依頼することがある。

5. 原稿の書式

- 1) 原稿は日本語または英語で執筆する。ただし, 例文等において中国漢字(簡体字・繁体字), ハングル, キリル文字, ギリシャ文字を用いることは可(それ以外の文字はローマ字化)。
- 2) 原稿はA4判横書き, 43字×36行で作成する。(編集委員会が認めた場合にかぎり縦書きも可。A4判縦書き, 30字×21行×2段。)英文の場合は半角86字×36行を目安に原稿を作成する。原稿はワープロを使用してできるだけ刷り上がり時のイメージに近い形で作成することが望ましい。
- 3) 研究論文及び調査報告には, **キーワード**(5つ以内), **要旨**(問題と結論の要約, 10行程度), **概要**(議論全体の概要, 英文は250語以内, 和文は20行以内)をつける。研究ノートには要旨とキーワードのみをつける。和文論文の場合, 要旨・キーワードは日本語, 概要は英語を用いる(概要には英語のキーワードもつける)。英文論文の場合, 要旨・キーワードは英語, 概要は日本語を用いる(概要には日本語のキーワードもつける)。英文のネイティブ・チェックは執筆者の責任においておこなう。
- 4) 注と文献は本文の後にまとめて示す。文献一覧の書式は以下のとおり。
著者名(発表年)「論文タイトル」『書名/雑誌名』巻号(雑誌の場合) ページ 発行所
例: 宮島 達夫(1972)『国立国語研究所報告43 動詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版
井上 優・生越 直樹(1997)「過去形の使用に関わる語用論的要因—日本語と朝鮮語の場合—」『日本語科学』1, 37-52, 国書刊行会
Bolinger, Dwight(1978) Yes-no questions are not alternative questions. H. Hiz

(ed) *Questions*. 87-105. Dordrecht : D. Reidel Publishing Company.
Hudson, Richard(1975) The meaning of questions. *Language* 51 . 1-31.

6. 査読

研究論文，調査報告，研究ノートは，編集委員会が依頼した2名の査読者が査読要領にもとづき審査する。編集委員会は，査読結果にもとづいて論文の採否を決定する。著者の氏名は査読者に公開せず，査読者の氏名も著者に公開しない。査読者と著者との連絡（査読者から著者への照会や修正指示，著者から査読者への回答など）はすべて編集委員会を介しておこなう。

7. 投稿の手続き

投稿原稿は随時受けつける。投稿に際しては，「著者の氏名／所属／連絡先（共著の場合は代表者の連絡先）／原稿の種類（研究論文，調査報告，研究ノートの別）」を明記の上，原稿一式を編集委員会に送付する。投稿原稿は原則として返却しない。

8. 採録決定後の修正

採録決定後，体裁や書式について編集委員会から著者に修正を求める（あるいは編集委員会の判断で書式の細部を変更する）ことがある。査読者及び編集委員会から指示があった箇所を除き，採録決定後の改稿や修正は認めない。

9. 著作権

掲載された論文等の著作権（著作権法第27条，28条を含む）は国立国語研究所に帰属する。

投稿原稿は，下記編集委員会まで郵送のこと。

〒115-8620 東京都北区西が丘3-9-14 国立国語研究所『日本語科学』編集委員会

問い合わせは，文書，FAX または電子メールで編集委員会まで。

〒115-8620 東京都北区西が丘3-9-14 国立国語研究所『日本語科学』編集委員会

FAX 03-3906-3530（共用につき『日本語科学』編集委員会宛明記のこと）

E-mail kagaku@kokken.go.jp

<http://www.kokken.go.jp/public/kagaku.html>

編集委員会からのお願い

投稿は随時受け付けますが、一応の目安として、4月刊行の号については前年の11月末日、10月刊行の号についてはその年の5月末日までにご投稿いただければ幸いです。

11月末日/5月末日以降に投稿された論文でも、審査の進み具合によっては、4月/10月刊行の号にただちに掲載されることもありますので、投稿の際は原稿の内容や体裁について十分に吟味してください。

全体の分量の関係で審査を通過した論文のすべてを掲載できない場合は、受理日が早い論文から先に掲載し、掲載できなかった分は次の号に掲載します。

原稿執筆の際は『日本語科学』投稿規定・執筆要領をよくお読みください。(書式の詳細については『日本語科学』所収の論文を参照してください。)また、原稿はできるだけできあがりのイメージに近いものをお送りください。

以下の点には特に留意してください。

- 1) 要旨とキーワードを本文の前につけてください。
- 2) 参考文献の後に、著者の氏名(ふりがな)、所属、連絡先(住所、電子メールのアドレスなど)をつけてください。
- 3) 論文の最後の1ページは概要(タイトル、著者氏名、キーワードを含む。和文論文の場合は英語、英文論文の場合は日本語)にあててください。概要は、論文の内容が把握できるよう、要旨よりもくわしい内容にしてください。
- 4) 論文の分量は、タイトル、氏名・所属、要旨、キーワード、本文、概要の合計が規定の分量を大幅に超過することがないようにしてください。
- 5) 英文のネイティブ・チェックは著者の責任でおこなってください。
- 6) 図版の転載など著作権にかかわることがらは、投稿の際に編集委員会までお知らせください。

『日本語科学』5 正誤表

P. 3 18~21行 誤：能 → 正：脳

P. 128 柱の部分 誤：Article → 正：Report

編集後記

毎号、巻頭言は国立国語研究所の評議員の先生方をお願いしている。前号では英語学の小池生夫先生から頂戴した。その玉稿中の「脳」とあるべきところをすべて「能」と誤記してしまった。お話の中の重要な箇所であり、非常に申し訳なく思っている。

「脳」についての論及は、本号にも続いている。廣瀬肇先生には音声言語医学のお立場から言語と脳の関係についてご執筆いただいている。一面では「脳科学」が非常に注目されていることの証ともいえよう。

今回、新しい試みとして、書評を掲載することにした。取り上げたのは「国立国語研究所プロジェクト選書」として発行された『新聞電子メディアの漢字』である。本格的なコンピュータネットワーク時代を迎えるにあたって、漢字と漢字コードの検討は時宜にかなったものと言えよう。評者は、言語処理研究などで著名な豊島正之氏をお願いした。従来 of 書評を超えた資料論とも呼べる力作をお寄せいただいた。

この号の英文校訂は国立国語研究所招聘研究員のカネギ・ルース氏をお願いした。

編集委員

- 江川 清 (委員長, 国立国語研究所)
井上 優 (国立国語研究所)
大島 資生 (東京大学留学生センター)
熊谷 智子 (国立国語研究所)
鈴木 美都代 (国立国語研究所)
田中 牧郎 (国立国語研究所)
塚田 実知代 (国立国語研究所)
藤井 聖子 (国立国語研究所)
横山 詔一 (国立国語研究所)

『日本語科学』 6

1999年10月

国立国語研究所

〒115-8620 東京都北区西が丘3-9-14
TEL.03-3900-3111(代表)

[本書の市販品発行所]

国書刊行会

〒174-0056 東京都板橋区志村1-13-15
TEL.03-5970-7421